

空手道詳説（45）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

（2）空手と沖縄の言語

ア 空手と沖縄語

2) 冊封使が伝えたと言われる型と沖縄訛り

- ・ ワンシュウ～この型は泊手の代表的な存在とされており、漢字で「汪輯」「汪楫」又は「腕秀」と表記されてきた。更に、この型はクーサンクーと同様に、琉球国渡来の冊封使が伝授したと言われてきた。

第二尚氏王統第11代・尚貞王（1646～1709年、在位：1669～1709年）は1669年に即位し、尚貞王への冊封使節団は1682年に北京を出立し翌1683年来琉しており、正使汪輯（翰林院檢討）、副使林麟焜（内閣中書舎人）であった。この時既に、即位から13年が過ぎていた。

中国と冊封関係にある国々は、新王が即位すると冊封使を招請する使者を送る。琉球国の場合なら、使者は渡海して福州に至り、そこに暫く滞在した後に陸路40日程費やして北京に到着し、数日待機した後に冊封使の来国を請う文書を上奏して任務遂行となる。その後、同じ道をたどって帰途に着くわけで、国を出てから帰国まで1年近く掛かる事前行動となっていた。

招請を受けた中国（この時代は清国）は、先ず正使と副使を決め、少ない時で300名余り、多い時なら500名を超す団員を伴って来琉し、儀式を始めとする行事のため6～8か月間も滞在した。迎える側の準備と出費は膨大となったが、この機会に両国間の交流と交易が行われたから、文化学術面の向上は勿論のこと、出費を上回る利益もあったと推定されている。

尚貞王即位時の冊封使派遣が遅れた理由は、1673年清国内に「三藩の乱」という内乱が起こったことによる。「三藩の乱」とは、元々が明の武将でであった呉三桂、尚可喜、耿精忠という三人は、清が明を滅亡に至らしめたとき清軍に協力した功績に



清朝第4代康熙帝画像

より、それぞれ雲南、広東、福建を各一藩としての領有が認められ、領内（藩内）の官吏任命権と徴税権も持ったことで独立小国家の体をなしていた。

三藩の存在を次第に疎ましく思うようになった第四代康熙帝（1654～1722年、在位：1661～1722年）は、三藩領有の制度を廃止すると決めたため、彼等は呼応して清に反旗を翻し、『満州人を追い出して漢人の天下を取り戻そう』をスローガンに清の軍隊を次々と打ち破り、一時は長江（揚子江）以南を全て奪うなど、清国は崩壊の危機に瀕した。スローガンにある「満州人」とは清朝人を差し、「漢人」とは清に敗れた明人のことである。

ところが、圧倒的勢力を誇った三藩側に体制上の問題と、そもそも漢人王朝の明を滅ぼしたのは他ならぬ呉三桂であった矛盾点などにより次第に民衆の支持を得られない現象を招き、清軍は次第に勢いを取り戻すとともに、乱は7年後の1681年10月に終結した。

この乱の最中に、清国の安否を気遣った琉球国王の行為を康熙帝が喜び、琉球に様々な特典を与えるとともに、1882年に冊封使節団を派遣したのであった。正使の汪輯は、帰国後に地方の一省を司る高官に出世するとともに、多くの著書を成した他「明史」の編纂にも参画している。琉球に関しては「中山沿革史」、「使琉球雑記」の著作を残している。正使汪輯は、琉球滞在中にワンシュウの型を教えたというのが言い伝えである。

さて、例の如く「空手伝真録」（上）から金城昭夫氏の見解を要約して引用するが、筆者はこの稿作成中に「空手伝真録」に下巻があると判明した。調査不十分を恥じるとともに、上記のとおり（上）を付した。

金城氏は「汪輯」の字を用いているが、「琉球王国の冊封使の一覧」（Wikipedia）やその他の資料に倣い以下「汪輯」と記す。

この型は、漢字の呼称で「汪輯」と名づけられ、それは「汪輯」という拳士が伝えた拳技だとされている。その原因は、「汪輯」が日本的な読み方でワンシュウに似た発音であることと琉球渡来の冊封使正使の中に「汪輯」なる人物がいることに由来した結果だと思われる。

しかし、著者の研究からすると、この型名称の「汪輯」も当て字であって正字でない。

そのことから考察を進めることにする。

第一に、汪輯の出身地は安徽省で、北少林寺のある河南省と太極拳の発祥地武当山のある湖北省の東方に位置し山東省の南に隣接する。安徽省とこの三省は北派武術の範囲になる。沖縄伝のワンシュウの型は明らかに南派武術の特徴を有しており、安徽武術ではない。



第二に、汪輯は冊封使節の正使であって、護衛武官ではない。冊封使は多く科挙出身者（科挙とは、応募者が多く難関とされる官吏登用試験のこと）で、特に翰林院は成績最高位の者が起用されるから、汪輯は超一級の学者であり武術など稽古して科挙の最高位まで到達できるとは思えない。また、冊封行事が済んだ後は、琉球王国貴族や高官たちは競って学問ある正使や副使、従者から学問、芸術、医学などの指導を受けたりした。他に汪輯は著述作成に忙殺されたわけで、学問以外の技芸を指導する余裕はなかったはずである。

第三に、時期は「三藩の乱」の直後で、鎮圧されたとはいえ耿精忠は福建省を領地としていたため、当然ながら護衛武官の主たる人物には福建人でなく他省の武人を採用したはずである。したがって、この時に福建武術は伝わらなかったと推測される。

第四に、康熙帝の政策は「重文軽武」であった。したがって、時のインテリ階級の世界では武術や労働的なものをけなす風潮が生まれ、社会全般が文を重んじ武を軽ろんずる風習であったことから、武科挙の出身者は立身の機会にも恵まれなかった。このことから推察して、科挙の最高位を目指した汪輯は、武術は修得していなかったと考えられる。

第五に、正使汪輯は安徽省の出身者で北京中央政府の高官であるから、官用語である北京語を使っていたのは当然である。「汪輯」は日本語では「オウシュウ」、北京語では「ワンジ」であり、日本語と北京語読みが混在している。

それでは、「ワンシュウ」の型の原語正字はいかなるものか、追及してみることにしよう。

結論から言えば、それは「王師父」であった。「父」とは父の如く慕い尊敬する師匠のことである。師父は北京語で「シフ」、福建語では「サイフ」である。北京語で「王師父」は「ワンシフ」であり、これが沖縄訛化してワンシュウとなったと考える。

これらからして、ワンシュウの型を伝えた武人は、福建人の上級武官でであったと思われる。上級武官となるには、武科挙を合格し北京語が話せないとならなかつ

た。

沖縄の武術の型には、始祖の名前をつけた型名称が多い。特に古武術の型はほとんどがそうである。

「王師父の型」(ワンシフの型)、「王師父の手」(ワンシフの手)が「ワンシュウ」に定着したのだろう。この型の伝来は清朝末期で、日本では江戸末期であろうと推測している。

筆者補註 1 : 安徽省の地図は、筆者が貼り付けた。

筆者補註 2 : 普通に科挙といえば「文科挙」のことであるが、他に「武科挙」という制度もあった。科挙制度の起源は、唐の即天皇后の時代(7世紀末)といわれる。武科挙は武官登用のための制度で、試験科目は学科の他に武技を加えた。武科挙の合格者は文科挙と違って出世は望めず、実戦の場では叩き上げの軍人の方がはるかに役に立つという実情もあった。科挙の制度は1300年以上も続き、清朝末期の1905年に廃止された。

筆者補註 3 : 伝真録から引用の最後2行目だが、『この型の伝来は清朝末期で、日本では江戸末期…』となっている。清朝の滅亡は1912年であり、幕末を経て明治維新となったのは1868年(明治元年)であり、年代的なずれがある。金城氏の書き違いと思われる。次項「ワンカン」型の記述ならば、「寅ぬ御冠船」が来琉した1866年となる。

金城氏の説をもって記しように、ワンシュウの型は1683年に来琉した冊封正使の汪輯が伝え、これまで330年余を連綿と引き継がれ、トウディー以前の手(ティー)の中で生き続けてきた型でなかったことになる。

それでは、ワンシュウの型はどのようにして沖縄に伝わったのだろうか。補足する形で同著の「ワンカン」の型を合わせて考えてみよう。

- ・ ワンカン~この型も泊手を代表する型の一つで、特に冊封使が伝えたとされている訳でないが、ワンシュウとの関連から触れなければならない。漢字名で「王冠」「王喚」と表記される。この型の場合、金城氏の見解は次である。

ワンカン型の動作の内容や象形が「王冠」、つまり「王様の冠」を表現するものは何もないし、その由来に至っては不明である。したがって、「王冠」は「ワンカン」型の音訳による当て字であることは明らかである。

それでは「ワンカン」型の原語と正字は如何なものであろうか。著者の研究では、それは「王武官」の型である。

武官も、武科挙の難関をパスして就任する官職であるから、職務上は北京官語で話していたはずである。北京語で武官はウカンと呼ぶ、したがって「王武官」は「ワンウカン」となるのであるが、琉球人は正しく聞き取れなかったのか、あるいは沖縄訛

化して呼びやすく「ワンカン」に定着したのだらうと著者は考えている。

「王師父」(ワンシフ)も「王武官」(ワンウカン)も、師匠に対する尊称であり、それぞれ北京官語が沖縄訛化して「ワンシュウ」「ワンカン」と定着したと考えると、この二つの型は同一人物が伝授したと考えられる。それは、「姓が王で、北京語の話せる福建人武官で、そして来琉した拳士」となると、(中略)

それはあくまでも推測であるが、考えられる人物は「王先生」(沖縄訛ワイシンザン)こと「王打興」であらうと考えている。幾つかの点を列挙してみよう。

第一に、「王先生」こと「王打興」は、福建布政司の武官候補養成所の総教練であった。高位高官の官吏であるからには北京官語が流暢に話せないといけない。清時代の当方で北京官語が話せるのは、激烈をきわめた武科挙の難関を乗り越え合格した僅少の官吏たちであり、北京官語を流暢に話せる武人は少なく数える程度であった。

第二に、「王打興」は福建永春人であり、白鶴拳の名人であり、羅漢拳その他にも精通していた。「王打興」は、開祖方七娘(ほう しちじょ)の夫君で二代目の「曾四」が養成した弟子の中の「五虎」と称される高弟五人の中の一人である。

第三に、「王先生」の呼称についてみると、琉球王朝末期の拳士らに多大なる影響を与えた「ワイシンザン」が「王先生」の沖縄訛の呼称である。

第四に、「ワイシンザン」は琉球王朝最後の冊封使「寅ぬ御冠船」(とらぬうかんしん)の護衛武官として来琉していることである。つまり「ワイシンザン」は武官であるからして、当時の琉球拳士等から「王武官」「王先生」「王師父」などと呼ばれていたはずである。

以上の事柄に合致している拳士は、王姓の武術高官としては「王先生」こと「王打興」のみである。

筆者補註 1 : 第二のところの白鶴拳であるが、前項で紹介した「沖縄伝武備志」(大塚忠彦翻訳)から「白鶴拳起源」の冒頭部分のみを下部に紹介する。

筆者補註 2 : 琉球国最後の王となった第19代尚泰王(1843~1901年、在位:1848~72年)は、4歳10か月で即位した。尚泰王への冊封使は正使・趙新、副使・干光甲で、1866年(慶応元年)6月に来琉し、この年が干支で丙寅(ひのえとら)年であったため、「寅ぬ御冠船」と呼ばれた。1404年が始まりだった冊封使来琉は、これが最後となった。その後明治新政府は、他府県の廃藩置県が終了した翌年の1872年(明治5年)、琉球藩設置によって尚泰は藩王となり侯爵に叙せられて王位を失い、更に1879年(明治12年)の琉球処分によって琉球藩から沖縄県になると、1187

年に琉球王家を樹立した舜天王以来、約 700 年続いた琉球王国は消滅し、日本（ヤマト）新政府の枠組みに組み入れられてしまうのであった。

白鶴拳起源

白鶴先師は方氏の七娘、福寧府 北関外 方種公の娘也。

幼きより 性 脱慧なり。

孝父 隣里の勢悪に欺かれ 遭歐し傷死被り。

七娘之を聞いて 地に昏絶す。

死欲とも 共に天を載かざる仇と誓う。

自恨 女流の身 弱質にして居ながら何とも無如。

終天 恨を報せんと其の寢食を忘る。

天性 生成の 孝の至也。

惟孝 天地神明 能く 感格せり。

一日、父を悲しみ 楼中に 哭く。此時 精神悦惚

突然 楼外の緑竹の叢中より 聲有るを聞く。

白鶴一对 飛舞干上 手を以つて 争鬪之蔵するを

望見す。

猶 是を觀るに、二鳥、雄を争い、上下分かたず、或

は翼を博げ、或は身を閃し 左右に遮欄し、当る不可

らざる 勢い有り、能く 一氣に力を行せ 力を借

り 勢いに就く。

于是 竹竿を以つて撃つに 其進退浮沈 遮敵一身

毫かも 害れること無く、良久鳴いて 飛び去る。

七娘 愕然として 白鶴の 田鳥なるも 灵性を持

つを思ふ。

若し人、此れを見可れば 物を知らず、



最後の琉球王の尚泰王



冊封使を運んだ御冠船絵図

ここでもう一つ注目すべき記述があるのです。それは金城 裕（1919～2013 年）の著書「唐手から空手へ」180 頁から引用すると次です。なお、この著者も「汪楫」の

字を用いているが「汪輯」に改めた。

泊地方（那覇市）に伝承されている「ワンシュウ」という型は、冊封使「汪輯」が伝えたものである。このワンシュウという型は、ワンカン、ワンダウという型と三つがセットになっている、ということである。（中略）

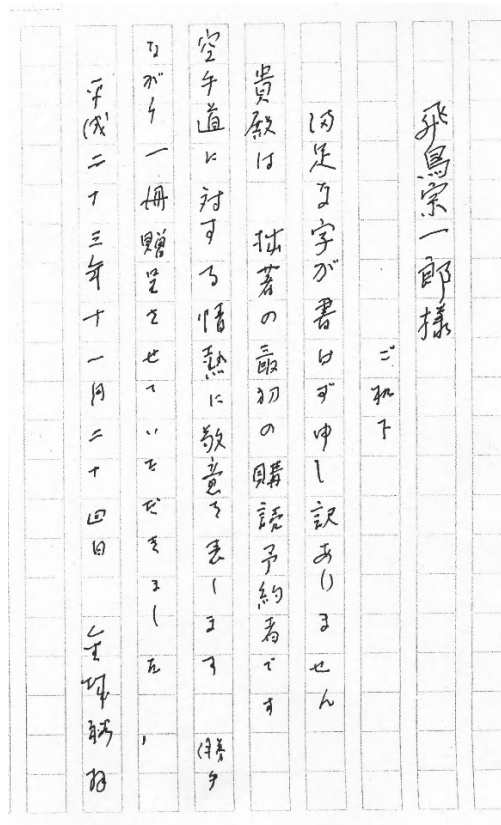
清代になってから第二回の冊封使汪輯は、琉球着任（1683年6月26日）から離任（1683年11月24日）まで、琉球におおよそ5か月間滞在した。その間ワンシュウ、ワンカン、ワンダウの三つの型を伝えたという話は、単なる伝説ではないかと考える。

確かに泊地区にワンシュウとワンカンの型は残っている。ただしワンダウの型は欠伝している。海外のどこかには伝承されているという話である。

金城 裕氏も金城昭夫氏共に、冊封正使汪輯がワンシュウの型を伝えたという話は否定的に考察している。また、ワンダウの型に関しては、前項のローハイやクーサンクーのところで述べたように、同系の技法を基に型（あるいは套路）が考案されるときは、三種（三つ）の型が作られたと記したことの証明といえよう。ただし、ワンダウについては「空手伝真録」（上）に記載がないので、基になった型や名称の謂れは現段階では不明である。

ワンシュウの場合、沖縄訛音化と身分高い方への憧憬が、読み名が酷似していることから出た誤説であったとしても、首里が伝承地ならばともかく、泊地方を代表する型であるという地域特定性も、そぐわない理由の一つになっている。

余談になるが、金城 裕氏と筆者は第1回世界空手道選手権大会（1970年）で面識を得て以来お声掛けいただき、敬慕する先師の一人であったことを付記しておこう。



参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」(上)、初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成9年9月30日、角川書店発行
- ・ 諸橋轍次著「大漢和辞典(辞典)」、初版昭和32年8月25日、大修館書店発行
- ・ 大塚忠彦翻訳、楊明時監修「沖縄伝武備志」、初版1986年4月、ベースボール・マガジン社発行
- ・ 島村幸一(立正大学教授)の論文、『土佐漂着の「琉球人」』
- ・ 今野敏著「チャンワミーグワー」、初版2017年12月、株式会社集英社発行
- ・ 金城裕著「唐手から空手へ」、初版平成23年11月30日、財団法人日本武道館発行